教師教育における生活科の教科内容の研究
－山口大学教育学部初等科生活の実践を中心に－

久保田　尚・池上　敏

A Study of the Content of a Course on the Subject Life Environment Studies in Teacher Education
- A case of a course on life environment studies in Yamaguchi University Faculty of Education -

KUBOTA Takashi, IKEGAMI Satoshi
（Received January 7, 2014）

キーワード：生活科、生活科単元、評価規準、模擬授業

はじめに

山口大学教育学部における生活科関連の授業は、1992年度から開始された。科目名は教科専門科目としての「初等科生活」、教職専門科目としての「教科教育法生活」の二科目、共に三年生前期の開講で、当時の小学校教員養成課程の学生対象の科目であり、このうち教科教育法の第一年次（1992年度前期）の授業記録は教科教育学研究第12集（日本教育大学協会第二常置委員会編、PP. 197～212、第一法規、1994）に詳しい。

その後、学部の改組や担当教官の退官、担当教員の退任、あるいは学部内の役職の担当状況により何度かクラスの編成替え、内容の改変を経て現在にいたっている。

現在、国立大学法人山口大学は大幅な改組を計画中であり、教育学部もその一部分として大幅な改組を迫られており、生活科関連の科目も改組に伴い、大幅な再検討を迫られること必定である。

今回、2013年度前期の初等科生活を中心に、授業記録として国立大学法人山口大学教育学部のものを投稿したのは、今後の生活科教育の検討に資する資料の提供を考えてのことである。本稿は、交流人事教員として大学に赴任し小学校現場で生活科の授業経験のある久保田が、2013年度前期限定で担当したクラスの実践報告である。

１．授業の概要

前述したように久保田は、交流人事で山口大学に赴任しているが、それまで長らく小学校現場で勤務した経験を持つ。実際のところ生活科を行う低学年の担任の経験は2カ年（どちらも2年生担任）であるが、一年間連続して生活科のカリキュラムに関わった経験は大きい。そこで、その経験を活かし小学校教員を目指す学生に生活科の単元を実際に体験させたり授業を仕組ませたりしようと今回の授業を仕組んだ。今回久保田が担当したクラスは3年生を中心とした36名。後半６単位分を「国立山口徳地青少年自然の家」での宿泊研修をメインとして行ったことが特徴である。

全授業の概要を以下に示す。

第１週	４月１２日	全体授業第１回目	チーム分け決定
第２週	４月１９日	生活科の概要（学習指導要領による）	今後の活動の見通し
第３週	４月２７日	「やまだい　だいすき」	大学内散策
第４週	５月１０日	「やまだい　だいすき」発表会	評価規準について
第５週	５月１７日	「共育の丘」散策	生活科の課題見つけ
第６週	６月１４日	「国立山口徳地青少年自然の家」での活動について	アンケート調査

第７週　６月２１日	「あしたへジャンプ」	自分史づくり
第８週　７月　５日	“徳地青少年自然の家”指導員の方からの指導	
第９週～第１４週		
７月１２日～１３日	国立徳地青少年自然の家にて宿泊研修	模擬授業づくり
第１５週　７月１９日	全体授業第２回目	活動報告

２．授業の実際

小学校学習指導要領「生活」に挙げられている９つの内容を可能な限り網羅すべく、いろいろな活動を仕組んでみた。以下、特徴的な取組内容について詳しく紹介していく。

２－１　「やまだい　だいすき」４月２７日　５月１０日　実施

４月２７日、生活科での「学校たんけん」の“大学バージョン”を行ってみた。実際の小学校の生活科の授業においては、子どもたちが友達といっしょに校舎内や校庭を歩いたり調べたりすることを通して、学校の施設や学校生活を支えている人々のことが分かり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにすることを主な目標として取り組む単元である。今回の授業では、学生たちを６人ずつ６グループに分け、以下の指令を出して大学構内に散らばらせた。

> やまぐちだいがくをあるいてまわって、おきにいりのばしょを５つ さがしてみましょう。
> どんなところがすてきなのか、かいておきましょう。

各グループ毎に大学構内を回り、普段足を踏み入れないようなところにも入って、それぞれのグループのお気に入りの場所を探させた。ほとんどの学生がスマートフォンを持っているので、お気に入りの場所を写真で取ってくるようにも指示した。下の写真はその一例である。

図１　お気に入りの場所 (1)

図2　お気に入りの場所 (2)

図３　お気に入りの場所 (3)

５月１０日にそれぞれのグループが見つけたお気に入りの場所の発表会を行い、場所の紹介やその場所のよさなどを報告させた。普段見慣れたものを改めて見る大切さ、普段見過ごしがちなものを再発見する面白さ、なにより子ども目線で見ることの大切さを伝えたかった。

そののち、評価規準について説明し、この「やまだい　だいすき」の活動について「生活への関心・意欲・態度」「活動や体験についての思考・表現」「身近な環境や自分についての気付き」の３つの観点で評価規準を作らせた。実際に授業を行う際にも、目標に準拠した評価規準をもとに評価していくことが大切だからである。評価規準を作成した後、その評価規準をもとに自分自身を自己評価させてみた。活動を仕組むときに評価を意識することの大切さを感じ取らせたり、実際に「評価すること」を体験させたりする意図があった。

学生からは「新しい発見があった」「意外と楽しかった」「友だちのよさや感じ方の違いを見つけることができた」等の感想があがってきた。

２－２　「共育の丘」散策　　５月１７日実施

大学会館近くにある「共育の丘」に登り、次のような指令を出した。

１　「共育の丘」であなたが“発見したこと”“すてきだと思ったこと”を５つ挙げましょう。 ２　この場所を「生活科の授業」で活用するとしたら、生活科のどの内容にかかわってどのような活動を仕組みますか？　最低２つの活動を考えてみましょう。複数の内容にかかわる活動を仕組んでも結構です。 季節はこの時期だけに限定しません。（夏でも秋でも冬でも） この場所「共育の丘」を学校の敷地内と捉えても、地域の公園と捉えてもどちらでも結構です。

後半に行う徳地青少年自然の家での活動に向けての予行練習のような形で行ってみた。今回は個人活動として行い、それぞれ個人で感じたよさをどのように「授業」として構成するかを考えさせたかった。鳥の鳴き声が聞こえたり、爽やかな風が吹いたり、きれいな草花が咲いていたり、学生は思い思いに自然を満喫しているようであった。

ただ、それを生活科の授業としてどの内容に関連させて、どのような活動を仕組んだらよいか、を考えるのは難しかったようである。自然そのものを体感する単元を仕組んだ学生や、自分が感じた自然のよさを他の学年の子どもたちに伝えることによって人とのかかわりへと発展する単元を仕組んだ学生など多様であった。

生活科の授業に活かせる素材を見つける力、またその見つけた素材を活かした生活科の授業を構想する力などを身に付けてほしいと考えてつくった授業である。

図４　「共育の丘」にて（１）

図５　「共育の丘」にて（２）

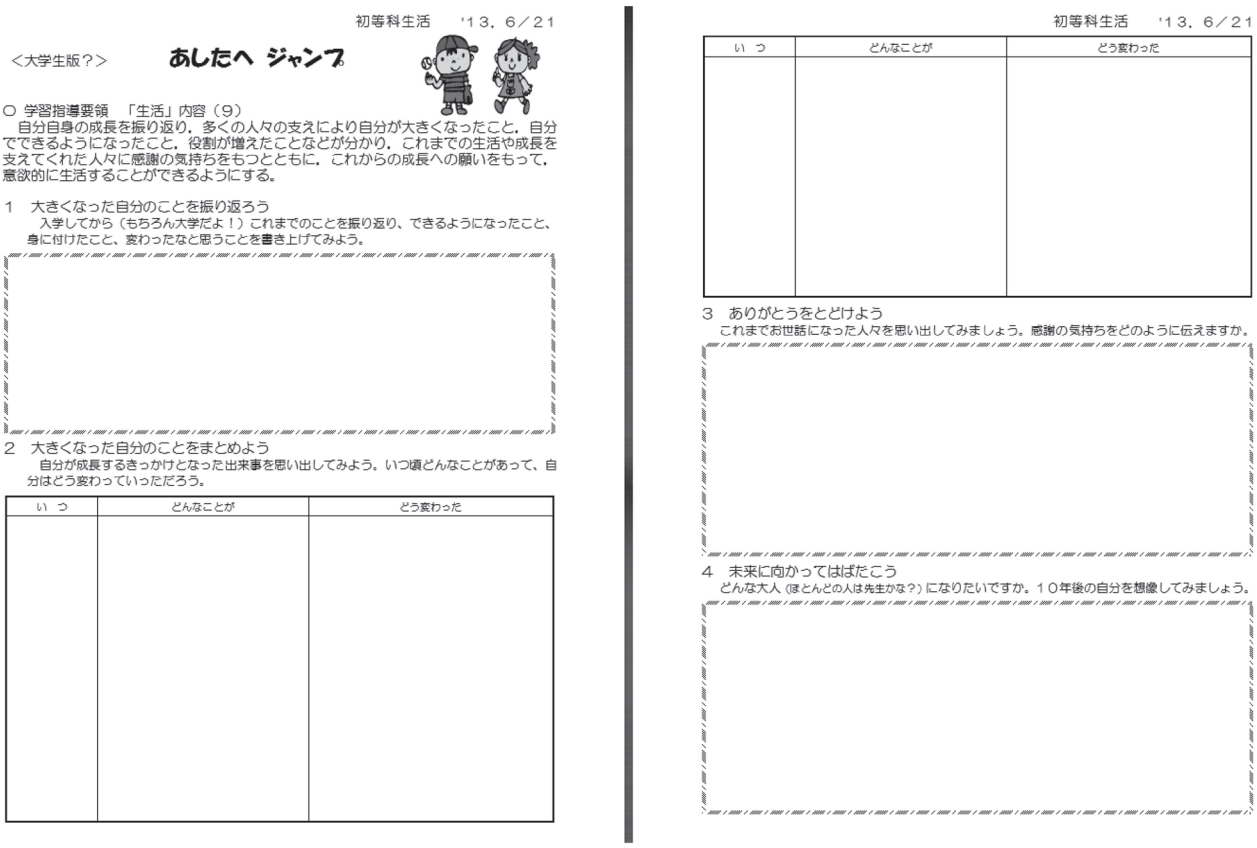
２－３　「あしたへジャンプ」　６月２１日実施

生活科２年生最後の単元としてよく行われる自分史をつくる単元を体験させた。

小学校では、これまでの成長を振り返ることにより、自分が大きくなったこと、自分でできるようになったことが増えたことなどに気付かせ、これまでの自分の生活や成長を支えてくれた人への感謝の気持ちをもたせることを目標として設定する単元である。

まずは、体験版という形で自分の大学入学から今までを思い出させ、“１　大きくなった自分のことをふりかえろう”“２　大きくなった自分のことをまとめよう”“３　ありがとうをとどけよう”“４　未来に向かってはばたこう”とステップを踏んで自分の成長を振り返らせた。小学校でこの単元を行う際、自分が生まれたときからの成長を見ていく場合と小学校へ入学してからの成長を見ていく場合とがあるが、学生たちには大学入学からを振り返らせた。ほとんどが３年生の学生であったので、３年前期のこの時期では実質２年間くらいの振り返りであったが、学生たちはその短い時間の中でも自分の成長を感じているようであった。高等学校までの実家で過ごす生活から親元を離れ一人暮らしをしている学生が多いからであろう、練習のつもりであったが、学生たちは本気に自分のこれまでの大学生生活を振り返っていた。

その体験をさせた後に、今度は小学２年生を対象に生活科の授業として、“１　大きくなった自分のことをふりかえろう”“２　大きくなった自分のことをまとめよう”“３　ありがとうをとどけよう”“４　未来に向かってはばたこう”という同じステップで、子どもたちにどのような活動をさせるかを考えさせた。自分が直前に体験したからか、多様なアイディアが浮かんでいたようである。実際に自分たちが小学２年生で体験したことを思い出す学生が多く、この単元は子どもたちにとって印象深いものであることが分かった。



初等科生活　'13．6／21

＜大学生版？＞　**あしたへ ジャンプ**

○ 学習指導要領　「生活」内容（9）
自分自身の成長を振り返り，多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと，自分でできるようになったこと，役割が増えたことなどが分かり，これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに，これからの成長への願いをもって，意欲的に生活することができるようにする。

1　大きくなった自分のことを振り返ろう
入学してから（もちろん大学だよ！）これまでのことを振り返り、できるようになったこと、身に付けたこと、変わったなと思うことを書き上げてみよう。

2　大きくなった自分のことをまとめよう
自分が成長するきっかけとなった出来事を思い出してみよう。いつ頃どんなことがあって、自分はどう変わっていっただろう。

い つ	どんなことが	どう変わった

初等科生活　'13．6／21

い つ	どんなことが	どう変わった

3　ありがとうをとどけよう
これまでお世話になった人々を思い出してみましょう。感謝の気持ちをどのように伝えますか。

4　未来に向かってはばたこう
どんな大人（ほとんどの人は先生かな？）になりたいですか。１０年後の自分を想像してみましょう。

図６　「あしたへジャンプ」大学生版

２－４　国立徳地青少年自然の家での活動　　７月１２日～１３日実施

７月１２日の５コマ目にいつものように２２番教室に集合し、それから教育学部玄関前に移動しバスに乗って徳地へと向かった。

青少年自然の家に到着してオリエンテーションを受け、食事を済ませた後、多目的ルームに集合し、今回の模擬授業の指導案を作成させた。「やまだい　だいすき」のときと同じように６人ずつの６グループで活動した。この時点ではまだ少し明るかったので、外に出て材料を調達に出かけたグループもあった。この時間の最後には各グループで大まかな授業の流れを発表し合い、授業の内容が重ならないように配慮した。

図７　授業構想中（１）

図８　授業構想中（２）

翌日は、午前中いっぱい授業の準備をさせた。外に材料となる草花を探しに行くグループ、お手本となる作品を作るグループなどそれぞれに時間いっぱい取り組んでいた。

図９　授業準備中（１）

図１０　授業準備中（２）

午後からいよいよ模擬授業を始めた。

以下、それぞれの授業の概要を紹介する。【主眼】は学生たちが作成した指導案に記載してあったもの、＊は当日行った主な活動である。

１　“しょくぶつハンター”になろう

【主眼】　植物を観察しふれあう活動を通して、植物の得意調に気付き、それを人に伝えることができる。

＊　「ミッションカード」をもとにグループで植物を探しに行き、「知ってほシート」に特徴をまとめ他のグループに紹介する。

２　自然ビンゴをしよう

【主眼】　自然ビンゴゲームをする活動を通して、班の仲間と協力しながら、自然や施設の方と積極的にふれあうことができる。

＊　カードに書かれた様々な自然や人とのふれあいをクリアしながらその記録をカードに貼っていき、最後に振り返りをする。

３　もりのじゅうにんになろう！

【主眼】　豊かな自然とふれあい、自然のものを使った服を作る活動を通して、自然と親しむとともに個性を表現することができる。

＊　ポリ袋を服に見立てて、自然にある葉っぱや木の枝などを使って装飾し、互いに発表し合う。

４　サマーハットをつくろう

【主眼】　夏の植物を使って帽子を作る活動を通して、自然に関心をもつことができる。

＊　あらかじめ画用紙で作った帽子を配布し、夏の植物を使って装飾したり絵を描いたり色を塗ったりしながら、夏をイメージするデザインの帽子を作成し、互いに発表し合う。

５　野山のアニマルパーク

【主眼】　葉や枝など身近な自然を使って動物のお面を作る活動を通して、自然の不思議に気付く。

＊　動物の特徴を想起させ、葉や枝などを利用して動物の特徴を表すようなお面を制作する。

６　はこにわをつくろう

【主眼】　徳地の自然にあるもので箱庭をつくることを通して、自然と関わり合いながら創造的な発想ができる。

＊　画用紙で作った箱の中に拾ってきた花や葉っぱ、木の実などを使って自分たちのお気に入りの場所を再現する。

材料を集めるのに相当苦労したグループがあったが、せっかく採取してきた草花がみるみるしおれてしまって、イメージ通りに材料を生かし切れなかったグループもあった。どの授業も創意制作する活動が多かったのだが、どのグループも独創的な作品を多く作っていたのには感心した。

４５分の一単位時間を想定して指導案を作成させたが、実際は時間の都合で一グループ２０分程度しか時間を与えることができず、じっくり活動に没頭できなかったのは申し訳なかった。

図１１　服の制作風景

図１２　箱庭の作品例

おわりに

教科教育法生活で、生活科のねらいや指導方法について学んでいるということであったので、初等科生活の久保田クラスでは、学生たちが子どもの立場になって実際に学習活動を経験すると同時に、指導者としての立場でも関われるように活動を工夫してみた。久保田が実際の小学校現場で生活科の授業を行った際に感じたこと、留意したことなども随時学生たちに伝えた。

そもそも小学校１・2年生でしか習わない「生活科」である。若い大学生であっても生活科の授業の記憶が残っている者は少ないようであった。しかし、今回小学校現場で実際に行われているような実践に取り組ませたことで、小学校時代に経験した生活科の授業を思い出したり、その活動の意義・ねらいなどを教師の立場から改めて理解したりする学生も少なからずいたようである。

将来現場に出たとしても、低学年を受け持ち生活科を担当することは確率的には低いかもしれない。だが、中学年からの社会科や理科、あるいは総合的な学習の時間の学び方の基礎を身に付ける生活科の重要性は、しっかりと認識してもらいたいものである。そのためには、教員養成段階での「初等科生活」「教科教育法生活」で、我々がしっかりそれを伝授していかねばならないと痛感した。